

社長の経営哲学の構築にお役立ちする <h1 style="text-align: center;">経営者への活きた言葉</h1>	税理士法人 優和 TEL 03-3455-6666 FAX 03-3455-7777
--	--

経営者への活きた言葉
<p>経営と執行の分離の本質的意義 三品 和広（神戸大学大学院教授）</p> <ol style="list-style-type: none"> 「経営と執行を分離せよ」と言われても、企業サイドには戸惑いを覚える。社内取締役が執行役員を兼務している現状では、どこまでが経営で、どこから先が執行か、よくわからない。執行もし、監督もするなど、どうしたらできるのか。では、ガバナンス改革の要請にどう応えればよいのであろうか。「分離」と、すでにある経営と執行を分けると解釈するからおかしくなる。これまで執行一色だったところに、新たに経営を付け加えるとすれば、何も問題は生じない。 執行は、企業の生業を所与としたうえで、社業を推進することを使命とし、そのために緻密な計画を立て、進捗を微細に管理し、問題があれば直ちに改善・改良する。これは、今や日本企業のお家芸といってよい。社業に携わる社員多数に信賞必罰を徹底し、こと執行に関しては世界で戦える。 それに対して経営は、企業の生業を変数とする。いかなる事業も、世の中が変遷を遂げる中で、いつかは衰退する。それゆえ、平時から次の事業の芽を育てなければならないのである。日本の企業の多くは、この意味での経営が不在のままであったからガバナンス改革が待ったなしなのである。 <p style="text-align: right;">（参考：「週刊東洋経済」2018年5月12日号）</p>

経営者のための理念・哲学
<p>新しい発見の積み重ね 横田 両嶺（臨済宗円覚寺派管長）</p> <ol style="list-style-type: none"> 坐禅の坐り方がこの頃初めてわかりました。もう日々発見、日々発見です。先日も仏様が蓮の花の上に立たれているのを見て、なるほどなど。あれは固い所じゃないから、力で立つのではなくて、ふわあっと立っていらっしやることを発見して、早速自らの坐り方を見直したところです。とかく人間は安定、安住したがりですが、一つのところに留まることはできません。だから新しい発見をずっと積み重ねています。 以前農家の方とお話した時に、「百姓をやっている以上上手くなると思うかもしれませんが、自然が相手だから毎年初心です」とおっしゃっていました。人間も同じように分からないものであって日々試行錯誤の連続です。 <p style="text-align: right;">（参考：「致知」：2018年7月号）</p>

経営者のための危機管理
<p>ビジネスを伸ばすには「負け」を認めること 桜井 博志（旭酒造会長）</p> <ol style="list-style-type: none"> ビジネスを伸ばすうえで大切なのは「負け」を認めることだと思います。私が社長を引き継いだ1984年当時は、売上高は前年比85%のペースで減少し、販売量は最盛期の3分の1に落ち込み、売上高は9700万円でした。やればやるほど泥沼にはまりましたが、抜け出したのは「負け」を認めるようになったからです。失敗という結果がはっきり出たら、あれこれ言い訳しない。負けを認めるからこそ、そこから欠点が浮かび上がり、どこが弱点なのかあらわになる。負けを認識した上で修正すればいい。 「結果が出なくても頑張る」という人がいますが、それはおかしいと思います。失敗はやはり負けとしてしっかり認識した上で、そこから次のことを考えるべきです。現在、売上高は120億円になり、今度は米ニューヨーク州で酒蔵の新設を目指します。 <p style="text-align: right;">（参考：「日経ビジネス」2018年6月4日号）</p>

古典に学ぶ
<p>乱世の豪傑</p> <p>（解説）乱世の豪傑が礼にならわず、とかく家道の^{とよの}齊わぬ例は、単に明治維新の際における今日のいわゆる元老ばかりではない。いずれの時代においても乱世には皆そうしたものである。</p> <p style="text-align: right;">（参考：渋沢栄一「論語と算盤」：国書刊行会）</p>